紀伊民報
2010年(平成22年)12月15日 水曜日 第20465号 (12)

日本一のクラゲ天国 田辺湾

カイヤドリヒドラクラゲ

久保田 信

2

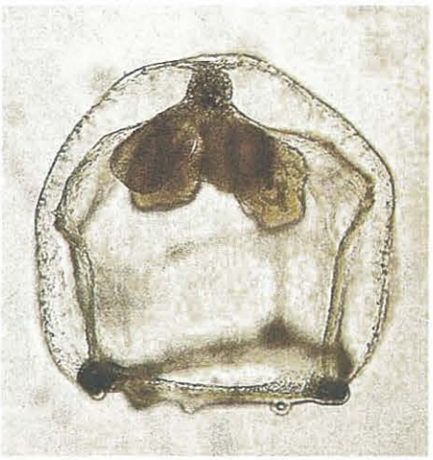
クラゲといえばエチゼンクラゲやミズクラゲなど大型で湾内を悠然と浮遊する姿を思い浮かべる。しかし、現存するクラゲの大半は肉眼でその美しい姿をはっきりと確認できないほど小さなものだ。カイヤドリヒドラクラゲも傘径1ミリにも満たない極小クラゲである。

非常にシンプルな容姿で世界的には珍しい種類だが、田辺湾とその周辺海域では簡単に見つけることができる。名前が示す通り、貝に宿って暮らしており、毎日、一定の時刻にクラゲを遊離する習性がある。ひょっとしたら貝と一緒に食卓に上っているかもしれない。

春から秋にかけての暖季に海岸へ行き、岸壁やいかだなどに付着しているムラサキイガイやマガキを採集する。これらの二枚貝を開き、中の軟体部を虫眼鏡や実体顕微鏡でのぞくと、たくさんのポリプ(クラゲの若い時代)が付着しているのが確認できる。ポリプは、一つずつが貝の柔らかい体のあちらこちらにいる。このようなポリプを新鮮な海水に入れ、室温(20～28度)で放置すると、毎日、夕方から日没後にかけて、たくさんのクラゲが泳ぎ出してくる。雌雄の区別は成熟した生殖巣を観察すれば簡単に分かる。遊離したクラゲは翌朝、辺りが明るくなるころ、卵や精子を放出して、その短い命を終える。

おとなのカイヤドリヒドラクラゲは、獲物を捕らえる触手もそれを食べて消化する胃袋もほとんど退化させており、繁殖のためだけに存在する。何ともはかないわけである。

写真の雄クラゲは、11月11日に、田辺湾奥の岸壁でプランクトンネットをひいて採取したもの。貝からポリプを取り出す以外に、このような方法でも頻繁に発見できる。



△ 成熟した雄のカイヤドリヒドラクラゲ

(京都大学准教授)